

フリーエネルギー実現回路1

(ウロボロス 2号)

渡辺 満 (静岡県)

§0 はじめに

これは、フリーエネルギーの発見(1)~(6).pdf の続きである。

前回では、フリーエネルギー要因のひとつである「アイ起電力」を発見した。

僕の当面の課題として、アイ起電力などを応用した、永久機関の開発があるのだが、(永久機関化しないと、説得力がないだろう。)

前回の魔法のコイル(アイ起電力コイル)では、力不足らしく、まだ成功していない。

そこで新たに、もっと強力なアイ起電力コイルが、必要になっている。

先日たまたま、相反コイルのつもりで作った、中空コア・コイルを試したところ、

これが、不思議にも大きなアイ起電力を示した。

電源は前回同様、ACアダプター DC6V(0.3A)を用いている。

- | | |
|------------|-------------------------------------|
| コイル0のみ | → AC13V, 2.5kHz |
| コイル1追加 | → AC17V, 2.2kHz |
| 中空コア・コイル追加 | → AC130V, 1.3kHz ★突然上昇、ここに注目！ |

コイルには、色々と未知の部分があって、理解できないことがある。

アイ起電力も、なぜそうなるのか、そのメカニズムも、現時点では不明確である。

電磁気だけでも複雑なのに、さらにその上に、

僕の考えでは、電磁ポテンシャルも絡んでくる。

ある場合には、電磁気が支配的で、ある場合には、電磁ポテンシャルが支配的になる。

さて、どちらによるものなのか？、常に悩まなくてはならない。

●これまでの実験・考察によって、コイルによるフリーエネルギーの発生には、次の、3種類のあることが、わかってきた。

- 1) アイ起電力
- 2) 相反コイル(そうはん)
- 3) 対面コイルによる磁束の衝突

この中で、もっとも効果の大きいものは、1)のアイ起電力だろう。

テスラコイルも、たぶんこれだ。

2)については、その理論を「エネルギー保存則の反例.pdf」に、何年か前に書いた。そちらを読みたい。

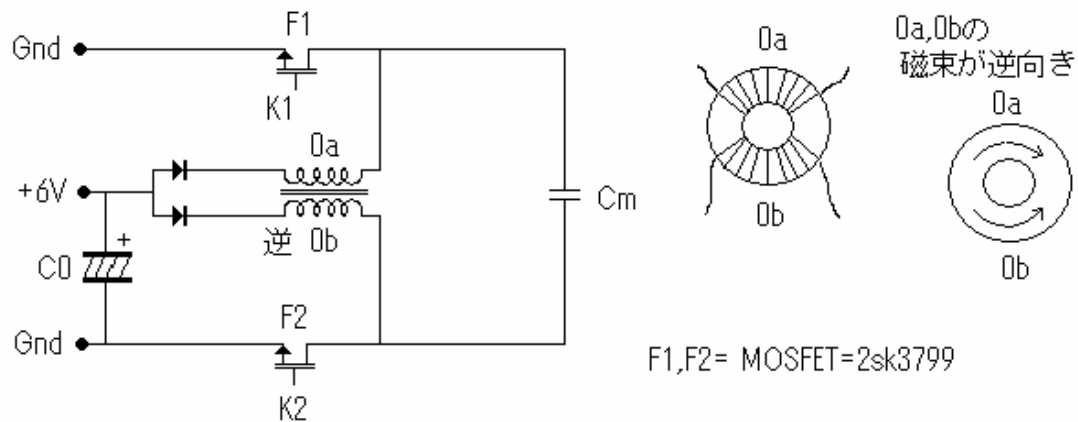
3)については、日本にも、その効果に気がついている人達がいるらしく、「漏れ磁束」とか「反発磁束」とかと呼んで書いている、記事をネット上で見た。

数年間の実験によって、フリーエネルギーの存在は間違いないことが、わかってきた。

僕が書いた、これらの資料を元に、

高い志を持つ個人や企業が、フリーエネルギー発電へ参入されることを、願っている。

§1 両方向パルス発生回路・基本形



Cm : コンデンサ 0.15 μ F

F1,F2 : MOSFET 2SK3799 (N-ch 900V,8A)

C0 : 9400 μ F (4700 μ F \times 2 個)

方形波 K1,K2 は、タイマーIC555 と JK フリップフロップによって作成している。

詳しくは、フリーエネルギーの発見(2).pdf を見られたい。

コイル0は、小さいが強力な、

コモンモードノイズフィルタ(チョークコイル):FM03D382MPF 日立金属ファインメット
を使用した。

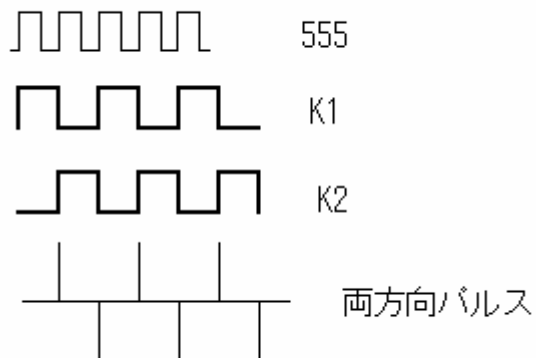
(ファインメットのコイルやコアは、なかなか手に入らない、これは運よく秋月電子で見つけた。
直径 25mm、左右に各々25 回巻いてあり、インダクタンスが 15mH と書いてある、
随分大きい。)



これを 1 個用いて、コイル0とした。

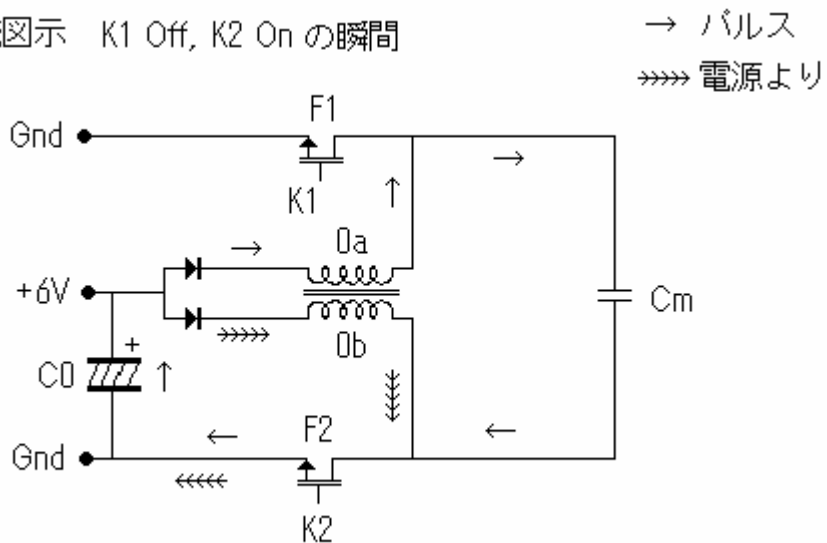
ファインメットでなく、フェライトでも、似たようなトロイダルコアによって、
同じくらいの結果が得られると思うが、フェライトの場合には、
ファインメットの倍以上の巻き数が必要になるだろう。

タイミング・チャート



- 方形波 K1, K2 の反転によって、コイル 0a, 0b には交互に、パルス状の電流が発生し、それが回路を回る、その様子を次図に示した。
次では、0a 側にパルス状電流が発生する。

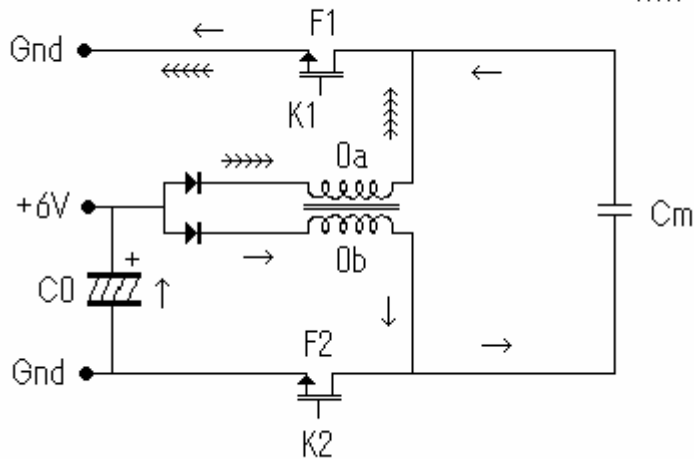
電流図示 K1 Off, K2 On の瞬間



次では、0b 側にパルス状電流が発生する。

電流図示 K1 On, K2 Off の瞬間

→ パルス
 >>>> 電源より



● Cm の交流電圧を測定

この回路を稼働させて、マルチメーターでコンデンサ Cm の交流電圧を測定した。

555 の周波数を調整して、それが最大になるところへ合わせると、

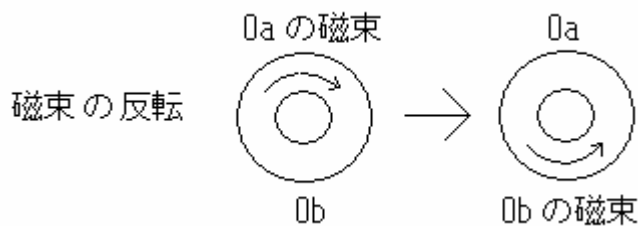
→ AC13V, 2.5kHz だった。

● 磁束を反転させる

コイル 0a,0b の結線は、次図のように、コアの中で 0a,0b の磁束が、互いに逆向きになるようにする。

それによって、コア内の磁束の変化が大きくなり、電磁誘導も大きくなり、

0a,0b に発生する起電力も大きくなる。



● コンデンサ Cm も、スイッチングしている。

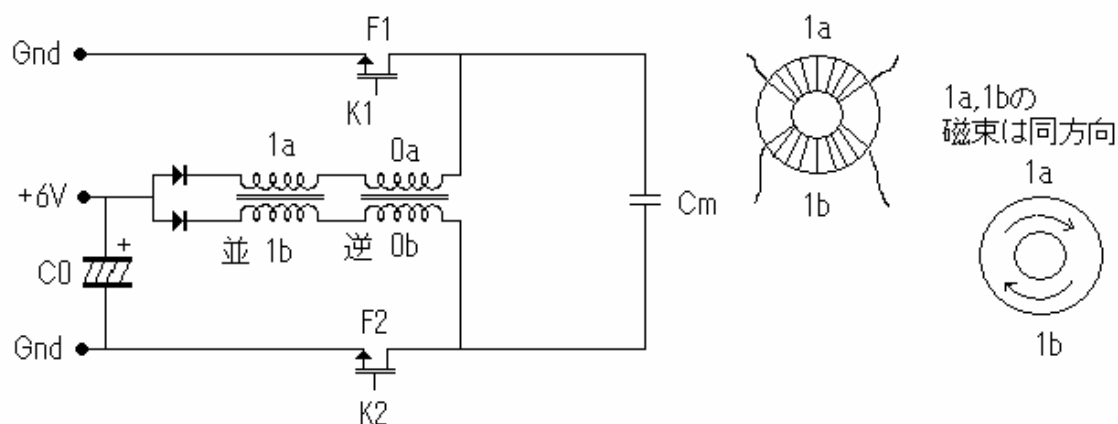
発生したパルス電流は、コンデンサ Cm を充電するが、

それがすぐに、逆戻りすることはない、Cm に固定・保持される。

この回路を注意深く見ればわかるが、K1,K2 の反転時の瞬間にしか、

Cm への電流の出入りは起きない。

§2 コイル0強化



● 障害要素の排除

コイル0の磁束の反転を、すばやく行うほど、発生するパルスは強くなるわけだが、しかし一方で、それを邪魔するものがある。

K1 Off, K2 On の瞬間に、

コイル 0a には、上図で→方向のパルス状の起電力が生じるが、
このとき同時に、0b には、←方向の起電力が生じる。

磁束の反転は、電源から 0b に流れ込む、→方向の電流によって、行われるのだが、
この 0b に発生した←方向起電力が、電源から 0b に流れ込む電流を邪魔する。

そこで、上図のように新たに、コイル 1 を追加する。

するとこのとき、1b には→方向の起電力が生じ、
これが、邪魔な 0b の←方向起電力を、相殺する。

その結果、電源から 0b に流れ込む電流は、スムーズにすばやくなる。

コイル 1 には、コイル 0 と同様の、

コモンモードノイズフィルタ(チョークコイル) : FM03D382MPF 日立金属ファインメット
を使用した。

このコイル 1 のアイデアは、推論ではなく、

気まぐれな思いつきの実験によって、得られた。

最初から、これを思いつくのは、むずかしい。

そもそも、パルス発生に、2つの独立したコイルを使うという発想は、出ない。

よいアイデアは、偶然から生まれることが多い。

● Cm の交流電圧

コイル 1 を追加し、マルチメーターで、コンデンサ Cm の交流電圧を測定すると、

→ AC17V, 2.2kHz だった。

これは、コイル 0 だけのときよりも、大きい。

ちなみに、コイル 1 の結線をコイル 0 と同じように、“逆”にすると。

→ AC15V, 1.1kHz だった。



● 磁束の衝突

ここには実は、磁束の衝突効果が、関与しているかもしれない。

0a,0b の2つの磁束が、衝突することで、起電力が生じている、可能性もある。

今までの経験から、

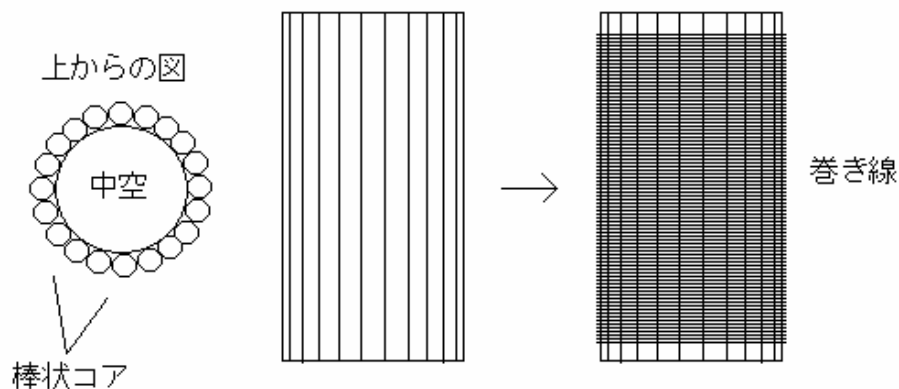
… 衝突させる2つの磁束は、両方がパルスだとだめで、

少なくとも片方は、時間的な幅のある方形波、であった方がよい。

たぶん、両方がパルスだと、時間的に、うまく衝突しないのだろう。…

「磁束の衝突」については、話がややこしくなるので、ここでは、これ以上は触れない。

§3 中空コア・コイル

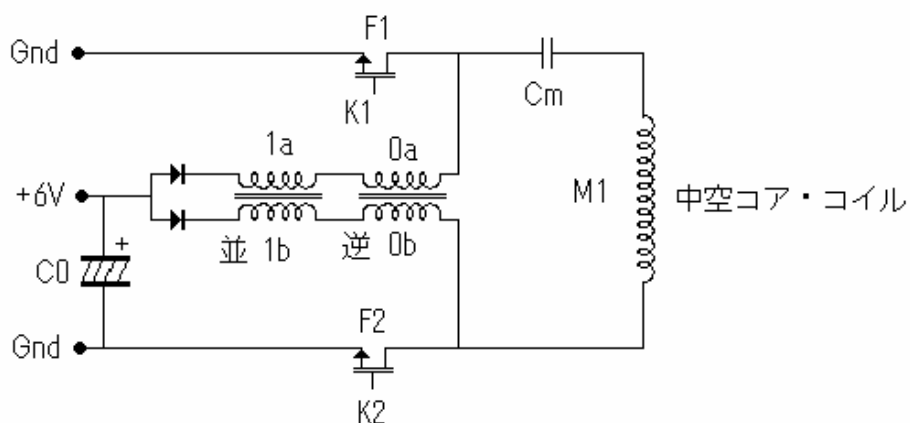


直径 7cmΦ、長さ 20cm の紙管を用意し、その回りへ、
棒状フェライトコア 15mmΦ、18cm 長を、18 本並べて、(購入先:ラジオ少年)
10cmΦ、長さ 18cm の中空のコアを作る。
その回りに、0.65mmΦのポリウレタン導線 170m を巻く。(約 500 回巻き)

● 中空部分の磁束はゼロ

こうしてできた、中空コア・コイルには、面白い性質があり、このコイルに電流を流すと、
磁束は、周辺のコアの中のみになり、中空部分の磁束はゼロになる。
(これは、何かに使えるだろう)

このコイルを、次図のように、前述の回路に組み込んだ。

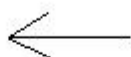


● Cm の交流電圧

この回路を稼働させて、マルチメーターで、コンデンサ Cm の交流電圧を測定した。
555 の周波数を調整して、それが、最大になるところへ合わせると、
→ AC130V, 1.3kHz …★注目！

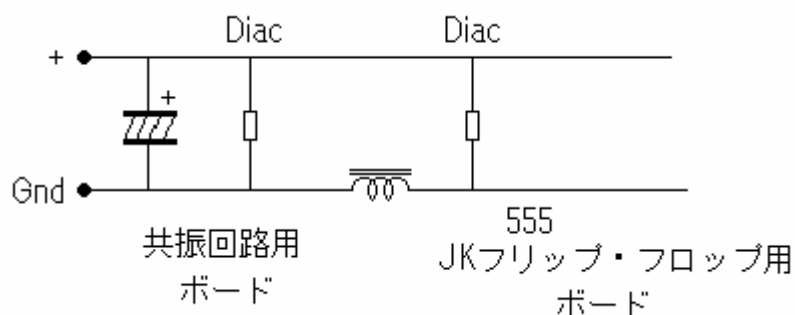
何と、突然 AC130V に上がった。
これが、アイ起電力と僕が呼んでいる効果である！
これが、フリーエネルギーである！

ちなみに、
フリーエネルギーの発見(5).pdf で紹介したような、
極太フェライト・コア(34mmφ、長さ 200mm)(購入先:ラジオ少年)に、
導線 170m(約 1500 回巻き)のコイルで試みると、
→ AC70V, 820Hz
でしかなかった。
この回路に限って言えば、中空コア・コイルの圧勝である。
(コイル 0 を替えると、わからないような気もするが、)



右のが極太フェライト・コアへ
1500回巻きコイル

§4 ノイズ除去



以前は、555(LMC555)が、時々壊れた。

そこで、電源とグラウンドの間に、ダイアックを2個橋渡しにした。

これにより、背の高いノイズは、ダイアックで32Vに切られる。

また、2つのボードのGndの間に(上図)、インダクタンスの大きいコイルを付けた。

これは、前述した、

コモンモードノイズフィルタ(チョークコイル) :FM03D382MPF 日立金属ファインメットの左右を直列につないで用いた。

ダイアックと、このコイルによって、555が壊れたり、不安定になる、は起きなくなった。

2017年11月発行 V1.0

著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2017年